

北海道チョウザメの博物誌 1

—遺跡、地名、絵図、民具からみた北海道のチョウザメの記録—

Natural history of the Hokkaido sturgeon 1

石橋 孝夫*

Takao ISHIBASHI*

キーワード：チョウザメ，アイヌ語地名，栗本丹州

はじめに

チョウザメ科魚類は淡水魚あるいは遡河性の魚で北半球の水域の北回帰線の北側に広く分布生息しており，2科6属28種がいるとされる（丸山，1986）．日本国内では近年でも東北地方から北海道の近海での捕獲例があり（橋場，2003），北部に多くみられる．

北海道近海でみられるチョウザメ類は図1に示した2種が代表的なものである．このうち「チョウザメ」とは日本固有種の標準和名で「ミカドチョウザメ」（学名：*Acipenser mikadoi*）である．かつては「チョウザメ」は「ミドリチョウザメ」

（*Acipenser medirostris*）だとされていたが，近年の遺伝子レベルの研究で，明治期にお雇い外人ヒルゲンドルフによって記載された「ミカドチョウ

ザメ」だとする見解が示されている（尾本・前林，2001）．

北海道内の河川ではチョウザメ類が遡上していたことは近世から昭和期初頭の記録にあることが知られている．この魚は成長すると体長1.5mほどでも体重数十キロにもなり，2mを超えるものになると100kg近い巨大魚となる．アイヌ民族はエゾセンユウが鳴く頃，この魚が川に入ることを知っていた（更科，1979）．アイヌ語ではユベ，ユーベなどといい，道内にはこれに因むアイヌ語地名が今もある．後に述べるように石狩川流域にもこの種の地名があり，かつてチョウザメ類の遡上があったことが推定される．また石狩市，旭川市などではこの魚に関する信仰や伝承もみられる．しかし，現在では河川への遡上が確認されておらず北海道では絶滅種に指定されている（北海道環境衛生部，2001）．

筆者はかつて石狩市を中心としてこの魚にまつわる信仰や伝承について調べたことがあり（石橋，1981；1994），その後もこの魚に関する資料を集め続けてきた．本稿はその調査の成果の一部でチョウザメ類の遺跡からの出土例，地名，絵図，漁具などの例について述べることにしたい．

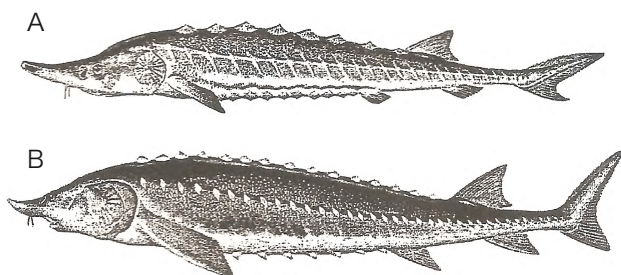


図1. チョウザメ（尼岡，1995）．

A：チョウザメ，B：ダウリアチョウザメ．

1. 北海道の遺跡から出土したチョウザメ類

北海道においてチョウザメ類はいつごろから

* いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

人々に利用されてきたのだろうか。現在，北海道内の遺跡の発掘調査では，縄文文化前期から現代アイヌ文化初頭にいたる11遺跡で体表にある硬鱗などが出土しており，この魚が捕獲されてきたことがわかる。残念ながら硬鱗からは種の特定は困難である。年代的には縄文文化前期（約6000年前頃）から食料などに利用されてきたといえる。

チョウザメの硬鱗などが出土した遺跡は表1のとおりであるが，1遺跡を除きいずれも近傍に中小河川がみられる。遺跡から出土するチョウザメは遡上期（春から初夏）に河川や河口域で捕獲したものと思われる。また富岡（2002）によると千歳市ユカンボシC2遺跡では鱗板の大きさや厚さから体長50cmから1mの個体が捕獲されているという。この大きさからみてシロサケと同程度かそれよりやや大型の個体とイメージすることができ，サケが遡上できる程度の河川であればチョウザメも遡上できた可能性がある。

捕獲法については近世以降では鉤鉚，鉤，網，ウライなどが知られているが，縄文文化では明らかではない。しかし縄文文化前期ごろから河川において定置式漁労具や石鉚，骨製鉚があることから，先史時代においてはこれらで捕獲したものと思われる。また種類については，現在も北海道近海で捕獲されているミカド・ダウリアの2種と考

えられる。

2. チョウザメに関連するアイヌ語地名

表2は永田方正の『北海道蝦夷語地名解』（永田，1884）から抽出したチョウザメとサメに関係するアイヌ語地名の一覧である。全道でこの種の地名は22ヶ所あるが，うち2ヶ所は明らかに海のサメあるいは鮫漁に関連する地名である。そして残る20ヶ所はチョウザメ類が起源となった地名に分類される。地域的には石狩川筋で多く採取されているが，これは他にこの種の地名が無かったということの意味するものではない。調査あるいは情報の偏りに起因するものと思われる。それはこの種の地名が松浦武四郎や近藤重蔵などの資料にも散見されることからわかる。

また石狩川筋の例では産卵場などの情報をもつ地名も含まれており，他の河川にもこの種の地名が存在した可能性がある。なおアイヌ語地名に関連して本来「鮫」を指すアイヌ語である「カルマ」あるいは「サメ・シャメ」もチョウザメを指すことがあり，注意が必要である。また，地名を集成し，前述の遺跡の出土データをあわせると，北海道チョウザメ類の遡上河川の全体を知ることができる可能性がある。

表1. チョウザメの鱗板等が出土した遺跡一覧。

	遺跡名	時 期	近傍の河川	出 典
1	芽室町西土狩4遺跡	縄文文化前期	十勝川	西本，1990
2	釧路市東釧路貝塚	縄文文化前期	釧路川	金子，1968
3	八雲町コタン温泉遺跡	縄文文化後期	遊楽部川	西本・新美，1992
4	釧路市天寧1遺跡	縄文文化後・晩期	釧路川	富岡ほか，2011
5	枝幸町目梨泊遺跡	オホーツク文化	海か？	西本，1994
6	札幌市H317遺跡	擦文文化	豊平川	富岡，1995
7	札幌市H37遺跡	擦文文化	豊平川	富岡，1996
8	札幌市K113遺跡	擦文文化	琴似川	富岡・仙場，2005
9	札幌市K39遺跡	中世	琴似川	富岡，1997
10	千歳市ユカンボシC2遺跡	アイヌ文化	千歳川	富岡，2002
11	苫小牧市弁天貝塚	アイヌ文化（明治）	勇払川	金子，1987

表2. 永田方正『北海道蝦夷語地名解』中のチョウザメ・鮫関係地名集成.

ページ	国	郡	河川名	ローマ字表記	カタカナ表記	地名解釈	永田による注解	編者の分類	
1	59	石狩	札幌	江別川	Yube putu	ユベ プト	鮫川口	今江別太	チョウザメ関係
2	59	石狩	札幌	江別川	Yube otu	ユベ オツ	鮫居ル川	江別ト云フハ訛リナリ松浦氏日誌ニ「エベツ」ハ「エベツケベツ」ニテ三口川ノ義此川三派ニシテ兎ノ口ニ似タリ故ニ名クト然レトモ当時ノ「アイヌ」ハ多ク好漁場ノ地名ヲ秘シテ語ラザルヲ常トスルヲ以誤マレルナリ明治十年十月江別村ヲ置ク	チョウザメ関係
3	59	石狩	札幌	江別川	Sanno yube	サノ ユベ	下ノ鮫川	「サノ」ハ「サノプト」(下方ノ口)ノ「サノ」ニ同シ、	チョウザメ関係
4	60	石狩	上川	石狩川左	Nai ta yupe	ナイ タ ユベ	川鮫	此川へ鮫入ルニアラズ本川絶壁ノ下ニテ鮫ヲ捕リ舟ニテ此川へ運ビ陸ニ揚ク故此名アリ	チョウザメ関係
5	65	石狩	上川	石狩川本右	Shup poro	シュブ ポロ	鮫ノ産卵多キ處	「カムイコタン」ノ原名ナリ或土人云「シュボロ」ハ「プイヲボロ」ト同義ニテ大瀬ノ義ナリト	チョウザメ関係
6	83	石狩	空知	空知川左	Hak shup oma nai	ハク シュブ オマ ナイ	鮫ノ産卵スル浅キ川		チョウザメ関係
7	83	石狩	空知	空知川左	Oho shup oma nai	オホ シュブ オマ ナイ	鮫ノ産卵スル深キ川		チョウザメ関係
8	85	石狩	空知	空知川右	Panke shup	パンケ シュブ	下ノ鮫ノ産卵場		チョウザメ関係
9	85	石狩	空知	空知川右	Shup oma nai	シュブ オマ ナイ	鮫ノ産卵場		チョウザメ関係
10	86	石狩	空知	石狩川左	Nai ta yupe	ナイ タ ユベ	川鮫	上空知ニ郡ノ界○上川ノ部ニ詳ニス	チョウザメ関係
11	87	石狩	空知	石狩川左	Yube ot	ユーベ オツ	鮫居川	石狩川ノ旧流部沼トナリテ流ル川○字江部乙又江部乙橋トアルハ非ナリ	チョウザメ関係
12	88	石狩	空知	石狩川左	Shup oma nai	シュブ オマ ナイ	鮫卵川	鮫ノ卵ヲ置ク川○第二号橋	チョウザメ関係
13	140	後志	歌棄		Same koiki tomari	サメ コイキ トマリ	鮫漁泊	一名ボロベツ	鮫漁関係
14	252	胆振	千歳	漁川筋	Karuma nai	カルマ ナイ	鮫場	川名	チョウザメ関係
15	291	日高	静内	捫別川筋	Same	サメ	鮫 和名		鮫漁関係
16	331	十勝	十勝	浦幌川筋	Yube hattara	ユベ ハッタラ	鮫淵		チョウザメ関係
17	344	十勝	河東	音更川筋	Naita yube	ナイ タ ユベ	川鮫	川鮫多シ	チョウザメ関係
18	462	天塩	上川	天塩川ノ右支	Nai ta yube	ナイ タ ユベ	川鮫		チョウザメ関係
19	462	天塩	上川	天塩川ノ右支	Tu nai ta yube	ト ナイ タ ユベ	川鮫		チョウザメ関係
20	495	北見	紋別		Yube	ユベ	鮫	湧別村ノ原名	チョウザメ関係
21	503	北見	紋別	サナブチ川筋	Shi yube	シー ユーベ	鮫川ノ水上		チョウザメ関係
22	540	北見	斜里		Karama wattara	カラマ ワッタラ	鮫ヲ突ク處	「ヨコ」ハ幌フノ義槍ヲ以テ鮫ノ通ルヲ幌ヒ突キ捕ルヲ云フ	鮫漁関係

3. チョウザメ類の絵図

チョウザメ類の絵図は18世紀後半からみられる。これは本草学の隆盛とともに動植物への関心が高まった結果とあいまって、記録され図譜に残されたものである。一部では珍魚怪魚として異様

な姿で描かれている場合もあるが、極めて正確に写生されたものも存在する。また近代でも何点か絵図があるので示す。

近世においてはチョウザメ類の皮は鮫鞘の原料として蝦夷地から本州へと運ばれた。畔田翠山の『水族志』（畔田，1827）の「キクトヂ潜龍魚」の項で「大和本草曰キクトヂ蝦夷ニ出」という記

載がある。「キクトヂ」とは「菊閉じ」のことで後述するように鮫鞘に使われる鮫皮あるいは鮫の名称のことである。『大和本草』とは貝原益軒の宝永7（1709）年の著作であり，この記述は同書巻十三の「鮫魚」の項目に「○日本ニ鮫魚類多シ菊トチ蝦夷ニ出」と出てくる（貝原，1709）。18世紀初頭には蝦夷地からチョウザメ類の皮が出されており，その存在がかなり知られていたことがわかる。

さらに『松前志』（松前，1781）では「テフザメ 是尋常の鮫にあらず。此魚西蝦夷地テシヲ、ユウベツ邊にわきて多し。方俗これを蝶鮫と云。菊花形顕然たり。當今の士夫帯刀の飾とし。其鞘にも用ゆ。美観にして又武用とするに足れり。夷方是をカリマと云。此物享保二年有ニ台命一而呈上せしなり。」

ここから天塩川，湧別が産地である情報，皮の使用法などが読み取れるが，「方俗これを蝶鮫」という記述は「松前では蝶鮫」と呼ぶとも理解でき注目される。

（1）『鮫皮精義』の図

最初に示すのは『鮫皮精義』（稲葉，1785）に掲載されている図で鮫鞘に関連する資料である。この図は蝦夷地のチョウザメ類がどのように利用されていたかなどを知る上で貴重である。この本は天明5年，浪速の稲葉通龍によって書かれた。内容は刀剣の柄や鞘に使用される各種鮫皮を網羅した事典である。またこの本より先に出された『鮫皮精鑿録』（浅野，1759）にも「キクトヂ」の記載がある。それによると「菊閉日本のものなり松前より出る 蝶鮫菊閉の脊に有るものなり」とある。この記載から「菊閉じ」とは魚の名前であり，「蝶鮫」は菊閉じの背にあるものということになる。蝶鮫の名称の起源については，諸説あるが当初は「菊とじ」が魚名であった可能性がある。

なお鮫皮を刀剣の装飾に用いることは古代中国に始まり，それが日本にも伝わり，正倉院御物にも鮫皮を柄に使用したものが納められているとい

う（蓑島・森，2009）。蝦夷地からチョウザメ類の皮が出されるようになった最初の時期については今のところ不明である。

この図は先に述べたように「菊閉じの背」にある「蝶鮫」の部分を示したものである（図2）。おそらく蝦夷地から出荷される際にはこれに近い形状であったものとみられる。頭と尾は無い。5列ある鱗板列は3列しかみられない。両側辺には小孔があり，その部分が外側に突き出している。おそらく，板に貼りつけなどして皮を伸ばしたためこのような状態になったものと考えられる。おそらく本図は鞘に貼られる直前の状態を示しているであろう。

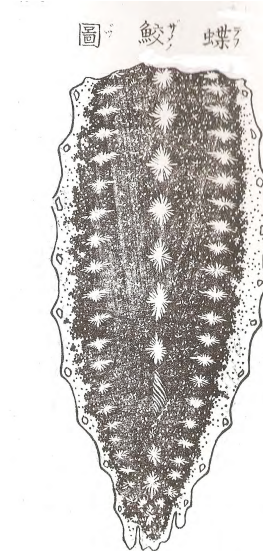


図2. 「蝶鮫図」.

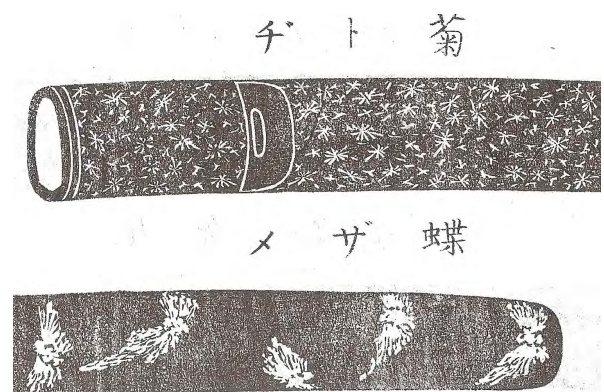


図3. 「菊トヂ」「蝶サメ」.



図4. ダウリアチョウザメとその頭部（いしかり砂丘の風資料館）。

ところで頭部，胸ビレ，尾はどう処理されていたのでしょうか．というのはこれらの部位は中国では食用として珍重されたというが，これらは出荷されなかったのでしょうか．この点については今のところ手がかりは無い．

次に「菊トヂ」と「蝶サメ」と書かれた鞘の図である（図3）．これらはすでに漆に埋め込まれ，研ぎ出され鮫鞘として完成された状態の図である．

本文では「菊トヂハ 奥州松前産し此沙皮ハ蝶沙皮の腹の方なる肉多く花の形ある所にミを拵ミて鞘に装ふ」とあり，この本では「菊トジ」はチョウザメの腹部下側にある花模様のある部分を選んで製作したと理解される．しかし，石狩川河口で捕れた2体のダウリアチョウザメの剥製の観察では腹側をみてもこの説明にある「菊トジ」に相当する花形の模様は確認できない．先に上げた『水族志』では「キクトヂ 大和本草曰菊トヂ蝦夷ニ出本草啓蒙曰キクトヂノ全身ニアル小珠花斑ノ形菊ノ如シ」とあり，体全体に菊のような斑文があるとしている．蝦夷地産のチョウザメはおそらくミカド・ダウリアの2種であろうことは述べたが，本図に示された2種の鞘がどちらであるのか，今後調べる必要がある．なおダウリアチョウザメの頭部には菊トヂに似た文様がある（図4）．

関連して「Blog鬼火～日々の迷走」（藪野，

2008）に「チョウザメのこと」という記事に読者Y氏から提供された「菊綴」の鞘とする画像があるので引用する（図5）．しかし，「菊綴」とはあるものの拡大画像では鱗板が研ぎだされたと考えられ，正確には「蝶サメ」ではなかろうか．今後，チョウザメ皮を使用した鮫鞘も調べてみる必要がある．

なお，「菊トヂ」とは「菊綴じ」に由来する．この模様は水干，直垂などの縫目に綴じ付けた紐の先がほぐされて，菊の花のような装飾効果が生み出されることからその名がある．『鮫皮精義』の説明では「角（つの）で刻ミ製したるものある」と書いており，「菊トヂ」の模様を際立たすための加工技術が存在したとも読み取れる．また鮫鞘は「鮫屋」という職人によって製作され，こ



図5. 菊綴じとされる鮫鞘の例（藪野，2008）。

の職業は江戸，大阪，京都にあったという（朝倉，1990）。

（2）栗本丹州『魚譜』潜龍鯊テフザメ皮甲の図

この図はチョウザメ類の乾燥皮の図で，栗本丹州の『魚譜』（栗本，成立年不明）に収められているものである（図6）。「チョウザメ皮甲」とあることから蝦夷地からもたらされたものと考えられる。添え書きに「潜龍鯊テフザメ皮甲 長尾蔵」とあることから，長尾氏所蔵の乾燥皮を描いたものであろう。

部位ははっきりしないが，おそらく背中硬鱗の部分と思われる。どのようにして長尾氏が入手したかは不明であるが，鯨屋などから買い求めたものだろう。

チョウザメ皮に関する記録は北海道東部に多く，文化6（1809）年の『東行漫筆』（荒井，1806）に白糠や厚岸でチョウザメ皮が生産されていることが記録されている。しかしこの他の地域での記録はほとんど見当たらず，今後調査すべき課題である。

（3）栗本丹州『栗氏魚譜』のチョウザメ図

この図は『栗氏魚譜』（栗本，成立年不明）の12巻目の袖サメの次に出てくる図である（図7）。チョウザメとう記載はないが吻部，4本の鬚，胸鰭，硬鱗，サメ形の尾が的確に表現されており，一見してチョウザメと分かる絵である。磯野直秀（磯野，2005）によると「文化3（1806）年10月24日 蝦夷で得た個体を戸川筑前守が江戸に持参。この日栗本丹州が写生する」としており，本図がその個体だとしている。拡大してみると背の部分に「菊トヂ」にあたるような菊花のような斑点も描かれている。

全体を合成すると図8のようになるが，これだけでは種は不明である。産出地も蝦夷地のどこなのか不明である。この当時すでに剥製にする技術はあったようであるが，丹州が写生したこの個体は生に近い状態だったようで，江戸まで塩漬けなどの防腐処置をとって運ばれたものと推測され

る。なお戸川筑前守は初代の函館奉行である。

また，山口隆男（2012）によると，シーボルトは1825年オランダにむけて動物標本を送ったが，そのなかにチョウザメの乾燥標本が含まれているという。おそらくこれも蝦夷地産のダウリアかミカド，いずれかのチョウザメだった可能性がある。

（4）松浦武四郎『蝦夷訓蒙図彙』鰈鯨の図

この図は『蝦夷訓蒙図彙』（秋葉・松浦，1997）にある鰈鯨の図である（図9）。本文では「鰈鯨」の字を使い「チョウザメ」としている。しかし，この図は一目でチョウザメというには程遠い姿をしている。どのような理由でこのような姿になっているか不明である。図はとにかく記載に注意すべき点があるのでそれを述べる。

本文の記載によると「鰈鯨（チョウザメ）潜龍沙魚ユウベ カルマ 石狩川上九十里の処まですめり。肉白くして味よろし。其皮かたくして、好事家の玩物なり。大きさ四五尺に及ぶ物有。是（を）以て膠を作る也。又一種アイウシサメ云うもの有。またボラザメとも云。夏日多く取りて乾魚とし（す）。」と解説される。これを読むとチョウザメには2種類（鰈鯨とアイウシサメまたはボラサメ）いると読める点である。「アイウシサメ」については「東夷産物志」（土岐，1799）年にも記載があるがチョウザメと別稿にあり，チョウザメとは同種ということは記載されていない。しかし松浦の記載から石狩川では2種のチョウザメがいたとも理解される。

（5）両羽博物図譜の鰈鯨図

（酒田市立光丘文庫蔵）

本図は本間（1988）によりすでに紹介されている資料で松森胤保（1825～1892）の未完の著『両羽博物図譜』（松森，1842以降）中の魚類図譜海魚部二（鯛部）にあるものである（図10）。説明には「明治十八年六月三日酒田ニ於見 一此の日一見の俛、心にとどめて略図す。最上川尻にて網に掛る所と雖ども、河魚に非ず。全く鰈鯨、又

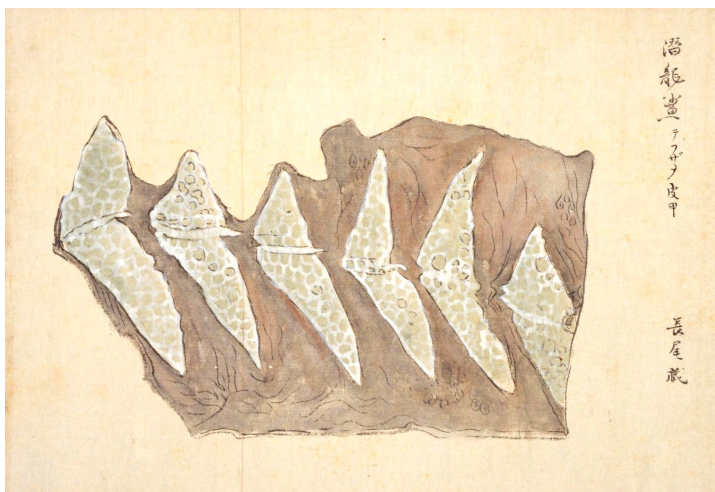


図6. 栗本丹州『魚譜』
(国立国会図書館デジタルコレクション) .



図7. 栗本丹州『栗氏魚譜』
(国立国会図書館デジタルコレクション) .

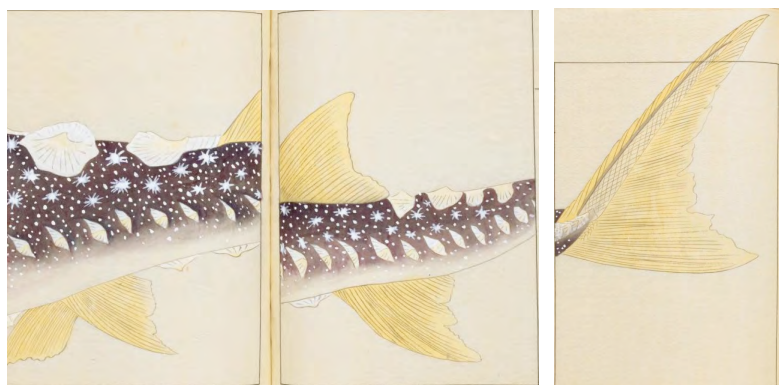


図8. 栗本丹州『栗氏魚譜』 (国立国会図書館デジタルコレクションから合成) .



図9. 松浦武四郎『蝦夷訓蒙図彙』鮎鮎の図.

は、ヤカラ魚等の種類に外ならざるを覚ゆ。其の色、茶黒色」と書いている。「ヤカラ魚」というのは不明だが「鮎鮎」とはつきり記載している。

もう一つは『両羽博物図譜』魚類図譜海魚部三（人魚部）に含まれている図で「鮎鮎明治廿一年六月八日復」とある。明治18年の方は種までは分からないが、この図のほうはミカドチョウザメのように思われる（冒頭の北海道近海のチョウザメ類の図参照）。この図に関して本間義治はチョウザメの一種としている。

筆者は捕らえられた時期と少なくとも一個体は最上川河口の捕獲であるという点に注目したい。というのは時期と場所からみると産卵で遡上する途上で網に入った可能性がある。とすれば東北地方でもかつては遡上河川があったと推測でよう。ちなみに東北地方では「大助」という巨大魚の伝説があるが、あるいはチョウザメがそのモデルなのかもしれない。

（6）伯林漁業博覧会関係書の中のチョウザメの図

明治13（1879）年ドイツベルリンで「伯林漁業博覧会」がおこなわれ、北海道からも資料が出品される。その準備にあった開拓使の関係書が北海道立文書館に残っている（北海道開拓使，1879a）。それを読むと北海道東部で捕獲されたチョウザメの剥製が2点用意されたことが分かる。また関連する伯林漁業博覧会解説書に2点の

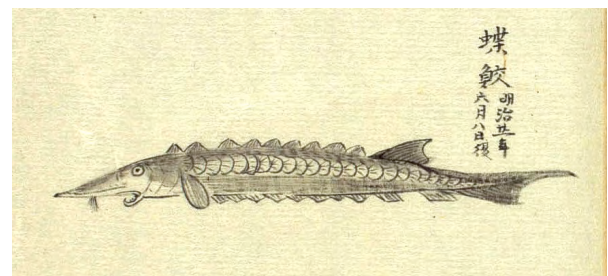
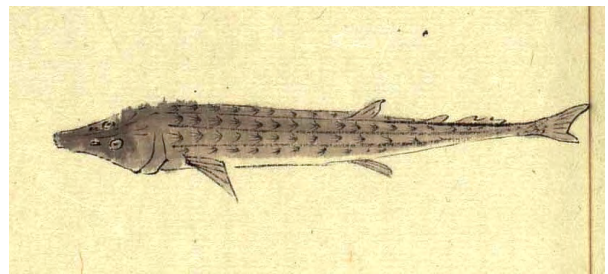


図10. 両羽博物図譜（酒田市立光丘文庫蔵）。

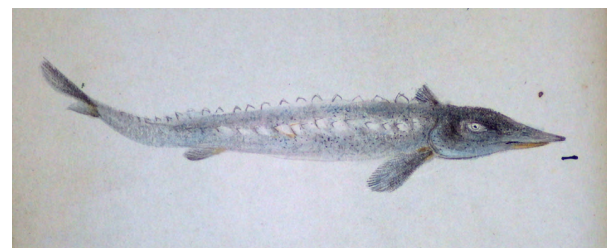


図11. 伯林漁業博覧会関係書（北海道立文書館蔵）。

チョウザメの図があり、その図を示した（図11）。図をみるとそれぞれ種類が異なるように思われる。種の特定は困難であるが、2種とすればダウリアチョウザメとミカドチョウザメの可能性はある。

また同書にはチョウザメに関する解説がある。

「鱒魚（チョウザメ）根室国別海付近海、釧路国釧路河ニ産ス昔刀剣ノ世ニ行ハレシ頃ハ専ラ此魚皮ヲ鞆鞆等ノ材ニ要セシヨリ年々盛ニ漁シタリモ庖刀ノ令下リシ已未舍テテ顧ミサルニ至レリ然レドモ今尚晩秋鮭ヲ漁スルノ際間々建網中ニ入又処ニ依リ鉈ヲ以テ突取スル事アリ「グードリッチ」氏博物書ニ英国ニ於テハ大ニ之ヲ食料ニ供シ且ソノ魚卵ノ製シタルモノハ欧州中賞味スル所ナリト又三才図絵ニ本草必読ヲ引テ云ク鱒ノ鼻傍ノ肉ヲ以直絲ニ作り名ケテ鹿頭肉ト為ス味美ナリ鱒亦膠ニ作ル云々夫レシスノ如ク有要ノ魚類ニシテ其所用世ニ遍カラサルハ誠ニ惜ムベキナリ タダシ別ニ図ヲ附」で鮫鞆に使用されたこと、秋鮭の建て網に入ること、場所によっては鉈でつく漁があったことなどが記載されている。

また、これと別に「獨逸國伯林府漁業博覽會出品目録解説」（北海道開拓使、1879b）のなかの「伯林府漁業博覽會出品目録」には「第三十二号鱒魚 剥製 壺 石狩國石狩 四円」と記載されている。この目録には明治13年2月と朱書きがあり、目録の最終版とみられることから実際に博覽會に出品されたチョウザメは1個体と考えられ

る。また産地は石狩國石狩となっており、当時の石狩町付近で捕獲された可能性が高い。代価は4円で極めて高い値段で当時すでに希少な魚だったことがうかがわれる。ちなみに鮭の代価は2尾で1円50銭である。

（7）『蝦夷みやけ』のチョウザメの図

この図は『蝦夷みやけ』（無名氏、1900）という本のなかにある図である（図12）。説明には「てふざめ 長三四尺から丈餘に及ぶ 石狩川河口邊に産す」とある。図が「丈餘」のものかどうか不明であるが、このサイズはメートル法に換算すると3m以上であり、このクラスはダウリアチョウザメの可能性はある。

以上、近世と近代のチョウザメの絵図について述べたが栗本丹州の『異魚図贊』（栗本、成立年不明）にあるチョウザメといわれる「ソウブカの図」と『兼霞堂雜録』（暁鐘成、1856）にある「異魚之図」はそれぞれ参考とはなるが今回は省いた。

4. チョウザメ漁具および民具

（1）イシュカラアブ

次にチョウザメ類の捕獲具および皮革製品について若干述べる。

まず漁具であるが記録ではアイヌのチョウザメ

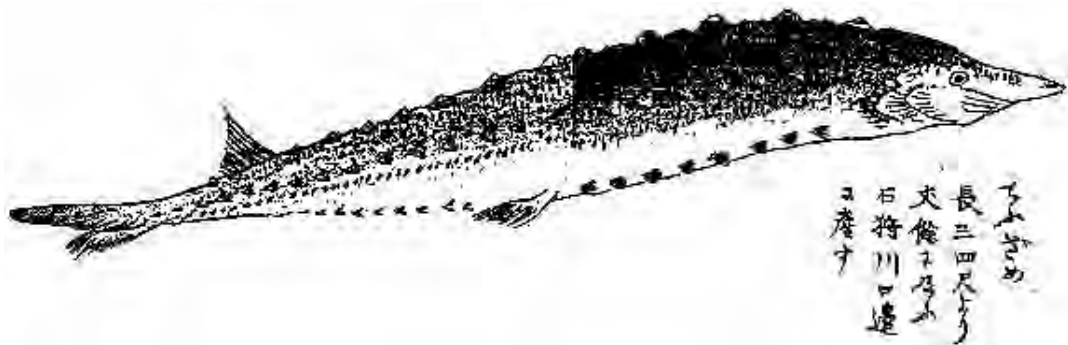


図12. 『蝦夷みやけ』下（国立国会図書館デジタルライブラリー）。

の捕獲ではウライやマレク，網などが使用されたとされているが，いずれもサケマス漁で使用する漁具であり専用の道具はほとんどないといっている。すでに鈴木（2004）によって紹介されているが「イシュカラアプ」という漁具について述べる。もちろん，これはアイヌ語名であり，アイヌ民族が使用した漁具と推定される。

この資料は名取武光が採取した資料で北大植物園博物館の所蔵品である（図13）。先にチョウザメ漁にマレクが使用されたと述べたが，この資料は「鉤」であり，サケ漁に使用された固定式の鉤ではなく離頭式のものである。資料全体では81cmありさらにこれに本柄がつけられる。鉄製の鉤部は基部と鉤部の2段になっており，この部分は面が形成されており，鍛冶屋など専門業者が作ったものとみられる。また柄の部分は差し込み部などの削り込みが意外に新鮮な面がみられる。また附属の縄（イネ科とみられる）は細く，時に数十kgの魚を上げるのには不向きと思われる。おそらくこの資料は模型あるいは再現品として作られたのではないかという印象をうける。気になるのは「イシュカラアプ」という名称で日本語では「石狩の鉤」と訳される可能性があり，これが正しいとすれば石狩市あるいは石狩地方で使用されていた漁具との推測が可能である。この点については今後の調査の課題であるが，この種の鉤は今のところ他に類例のないものである。

チョウザメ用の専用漁具について名取武光（1945）が「銚頭寸話」のなかで「この外石狩川の蝶鮫銚や十勝川の鹿銚や屈斜路川のイトオ銚など」と記述しており，銚で「蝶鮫銚」という漁具があると述べている。このことから石狩川流域では2種の専用漁具がかつて存在したことが窺われる。また「蝶鮫銚」に関連して，丹菊逸治（2007）によるとニブフ語にも「チョウザメ用銚先」という語があることを述べている。どのようなものである不明であるが，北海道およびサハリンではチョウザメ捕獲用の専用漁具が存在していたと考えられる。

（2）ウイルタの「マキリ鞘」

（函館市北方民族資料館蔵）

この資料はサハリンで採取された資料で鞘にチョウザメ皮が使用されている（図14）。

函館市北方民族資料館に収蔵されており，学芸員の長谷部一弘氏の教示によると全長31.8cm，口径4.3cmのものでチョウザメの腹から尾までの部分にマキリが入るようになっている。また鞘についている吊り下げ用の皮紐はトナカイ革製）である。長さからみておそらく体長70cm程度のチョウザメが使われたと推定される。チョウザメの種は不明であるがサハリンもミカドチョウザメの分布域であるのでこの種の可能性がある。

チュウネル・M・タクサミ（2009）によると樺太アイヌやニヴフも同種の鞘や火打石を入れる袋をチョウザメの皮で作っていたという。北海道アイヌもこうした利用法は知っていたと思うが，製品は道内では残っていないようである。鮫鞘への需要があったためかも知れ調査する必要がある。なお同種の資料はロシア科学アカデミーなどに所蔵されているが，鈴木邦輝によると北海道で採取されたものもあるという（鈴木，2005）。このことから同タイプの鞘は北海道アイヌにもあったのだろう。

（3）「オトホコホベ」煙草入れ

（旭川市博物館蔵）

この資料は表面に粒々の突起がみられる皮を使用した煙草入れで「チョウザメ皮」製と記録されている（図15）。採取地はサハリンである。厚さ6cm×高さ9.5cm×幅25cmのものである。実際手にとって観察はしていないが，前記のマキリ鞘に較べるとチョウザメの皮だという特徴が見つけづらい資料である。知る限りでは粒状の突起はチョウザメのどの部位であるかは不明である。なめし方など特殊な技術が使用されている可能性がある。

また同種の煙草入れは早稲田大学図書館にある小林豊章の「蝦夷カラフトサンタン三ヶ所打込諸道具絵図」（小林，1792）にもあり，「ヲコクラ



図13. イシュカラアブ
(北海道大学北方圏フィールドセンター植物園蔵) .



図14. ウイルタの「マキリ鞘」
(函館市北方民族資料館蔵) .



図15. 煙草入れ (旭川市博物館蔵) .

チ」と注記されている。「ヲコクラチ」がチョウザメを指す語かどうかは不明である。ちなみにサハリンにおけるチョウザメの皮製品については近藤重蔵（1804）の『辺界分要図考』にあり「腰ニ皮袋ヲ佩ク鯨ノ皮ヲ以テ制ス鱗ノ文理ニトナリ其魚ノ名ヲウツクラチト云フ」とあり、皮の文様で鯨と識別できたようだ。

おわりに

以上、北海道チョウザメに関して各種資料を提示して述べてきたが、北海道のチョウザメの利用は約6000年前から始まり、近世には鯨鞘の需要があり、名称もキクトヅからチョウザメに変化したことが窺われる。近代になって鯨鞘の需要はなくなった。一方、チョウザメの漁に関連してはアイヌ民族の「シュカラアプ」が石狩川筋で使用されていた可能性がある。関係は不明だが、「鯨鯨鉈」という専用鉈もあったようだ。チョウザメ皮を使った民具は近世では鯨鞘の需要のためかほとんど道内では製作されなかった可能性が高いが、サハリンでは製作されており、蝦夷地にも持込まれていた可能性がある。近代の絵図から東北や北海道では2種類のチョウザメがいたことが窺えた。今後さらに資料調査を進め北海道チョウザメの博物誌を編んでいきたいので、多くの方々のご教示を賜りたい。

謝辞：本稿をまとめるにあたり次の機関，個人からご協力を賜った。記して感謝申し上げる。

国立国会図書館，九州大学附属図書館，山形県酒田市光丘文庫 佐藤茂穂，北海道立図書館，北海道立文書館，旭川市博物館，(公財)北水協会 塩田健二，北海道信用漁業協同組合連合会・北海道漁業連合会図書資料室，北海道大学北方圏フィールドセンター植物園 加藤克，函館市立函館博物館・同学芸員 小林貢，佐藤理夫，(財)函館市北方民族資料館・長谷部一弘，名寄市北国博物館 鈴木邦輝，釧路市埋蔵文化財センター 石川朗，日本生物地理学会 森中貞治，相澤恵，いしかり砂丘の風資料館同僚。

引用文献

- 暁鐘成，1856．兼霞堂雜録．日本随筆大成第一期，14：11-161．
- 秋葉實 翻刻 編，1997．蝦夷訓蒙図彙（松浦武四郎）．北海道出版企画センター．
- 尼岡邦夫，1995．チョウザメ．日本大百科全書15，小学館，pp.612-613．
- 荒井保恵，1806．東行漫筆．釧路叢書第2巻．釧路関係日記古文書集（釧路市，1961）．
- 朝倉治彦 校注，1990．人倫訓蒙図彙．東洋文庫519，平凡社．
- 浅野遠視，1759．鯨皮精鑿録．随筆文学選集第四，pp.273-312．
- 橋場末治，2003．松浦武四郎のスケッチ画などについてpart 4．楽水（旧東京水産大学校友会誌），804：15-23．
- 北海道開拓使，1879a．獨逸國伯林府漁業博覽會關係書類．北海道立文書館3682．
- 北海道開拓使，1879b．獨逸國伯林府漁業博覽會出品目録解説．北海道立文書館3350．
- 北海道環境衛生部，2001．北海道レッドデータブック2001．北海道．
- 本間義治，1988．本邦沿岸におけるチョウザメ類の記録．日本生物地理学会会報，43：51-10．
- 稲葉通龍，1785．鯨皮精義．九州大学附属図書館 九大コレクション．
- 石橋孝夫，1981．鯨神の誕生―石狩川の主伝説と妙鮫法亀大明神についての覚書き―．いしかり暦（石狩町郷土研究会誌），2：21-32．
- 石橋孝夫，1994．妙鮫法亀大明神の成立とその背景．石狩辨天社史，石狩辨天社創建三百年記念事業実行委員会．pp.34-49．
- 磯野直秀，2005．珍禽異獸奇魚の古記録．慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，37：33-59．
- 貝原益軒，1709．大和本草巻之13．早稲田大学古典籍データベース．
- 金子浩昌，1968．東釧路貝塚から出土した動物遺骸．釧路考古学研究会連絡紙，1-2：3-4．
- 金子浩昌，1987．動物遺存体．弁天貝塚Ⅰ，苫小牧市埋蔵文財調査センター．pp.55-68．
- 小林豊章，1792．蝦夷カラフトサンタン三ヶ所打込諸道具絵図．早稲田大学古典籍総合データベース．

- 近藤重蔵, 1804. 辺界分要図考. 早稲田大学古典籍総合データベース.
- 栗本丹州, 成立年不明. 異魚図賛. 国立国会図書館デジタルコレクション.
- 栗本丹州, 成立年不明. 魚譜. 本別10-3. 国立国会図書館デジタルコレクション.
- 栗本丹州, 成立年不明. 栗氏魚譜(巻12). 国立国会図書館デジタルコレクション.
- 畔田翠山, 1827. 水族志. 国立国会図書館デジタルライブラリー.
- 丸山為蔵, 1986. ティラピアとチョウザメの養殖. 新顔のさかな, 成山堂書店. pp.36-65.
- 松前広長, 1781. 松前志. 大友喜作編北門叢書第二冊所収, 国書刊行会.
- 松森胤保, 1842以降. 両羽博物図譜. 酒田市直光丘文庫蔵.
- 蓑島栄紀・森秀之, 2009. 「鮫皮」刀装の成立・展開に関する基礎的考察. 環太平洋・アイヌ文化研究, 7: 13-41.
- 無名氏, 1900. 蝦夷みやげ下. 国立国会図書館デジタルライブラリー.
- 永田方正, 1884. 初版北海道蝦夷語地名解.
- 名取武光, 1945. 鮭頭寸話. アイヌの捕鯨, 北方文化出版社. pp.131-133.
- 西本豊弘, 1990. 西土狩4遺跡出土の動物遺体. 西土狩4遺跡, 芽室町教育委員会. pp.73-74.
- 西本豊弘, 1994. 附編目梨泊遺跡出土の動物遺体. 目梨泊遺跡, 枝幸町教育委員会. pp.373-382.
- 西本豊弘・新美倫子, 1992. コタン温泉遺跡出土の動物遺体. コタン温泉遺跡, 北海道八雲町教育委員会. pp.443-468.
- 尾本直隆・前林衛, 2001. 北海道近海のチョウザメに関する研究. 北海道電力(株)総合研究報告書, 770: 1-28.
- 更科源蔵・更科光, 1979. チョウザメ. コタン生物記II, 法政大学出版局. pp.449-470.
- 鈴木邦輝, 2004. 北海道の河川におけるチョウザメ漁. アイヌ文化の成立 宇田川洋先生華甲記念論文集, 565-579.
- 鈴木邦輝, 2005. アイヌとチョウザメ漁. 平成16年度普及啓発セミナー報告集, 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構. pp.62-68.
- タクサミ, チュウネルM., 2009. アイヌとニヴフの文化に見られる若干の平行現象について. 国立民族学博物館調査報告書, 82: 247-252.
- 丹菊逸治, 2007. ニヴフ語, アイヌ語, ウイルタ語の民具関連の共通語彙について. H19 年科学研究費補助金成果報告書, 136-162.
- 土岐新甫, 1799. 東夷物産志. 北海道大学北方関係資料総合目録.
- 富岡直人, 1995. H317遺跡出土の動物遺存体および鹿角製尖頭器について. H317遺跡 札幌市文化財調査報告書46, 札幌市教育委員会. pp.215-237.
- 富岡直人, 1996. H37遺跡出土動物遺存体. H37遺跡 丘珠空港内, 札幌市教育委員会. pp.110-123.
- 富岡直人, 1997. K39遺跡大木地点出土動物遺存体. K39遺跡大木地点 札幌市文化財調査報告書54, 札幌市教育委員会. pp.87-105.
- 富岡直人, 2002. 千歳市オサツ2遺跡・ユカンボシ遺跡出土動物遺存体. 千歳市文化財調査報告XXVII, 千歳市教育委員会. pp.207-267.
- 富岡直人・仙場伸久, 2005. 石狩低地帯における先史時代漁労の研究. 日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集, 108-109.
- 富岡直人・鈴木宏行・沖田絵麻・立石和也, 2011. 天寧1遺跡出土動物遺存体の分析. 北埋調報274 釧路町天寧1遺跡(2), (財)北海道埋蔵文化財センター. pp.172-287.
- 藪野直史, 2008. チョウザメのこと. Blog鬼火～日々の迷走. <http://onibi.cocolog-nifty.com/>
- 山口隆男, 2012. シーボルトと日本の自然史研究-特に「衆鱗図」に関係して-. GEO-COMMUNICATION Working Paper, 2: 1-37.